岩波講座

文学

2

創造と想像力

岩波書店

岩波講座 文学

2

創造と想像力

岩波書店

〈執筆者紹介〉

大江健三郎（おおえ けんざぶろう） 1935年生 作家 『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』『文学ノート』

杉浦明平（すぎうら みんぺい） 1913年生 作家 『小説渡辺崋山』『田園組曲』

渡辺広士（わたなべ ひろし） 1929年生 文芸評論家 『危機の文学』『野間宏論』

井上光晴（いのうえ みつはる） 1926年生 作家 『地の群れ』『心優しき叛逆者たち』

長谷川四郎（はせがわ しろう） 1909年生 作家，文芸評論家 『シベリヤ物語』『長い長い板塀』

入沢康夫（いりさわ やすお） 1931年生 詩人 （詩集）『入沢康夫〈詩〉集成』（詩論）『詩の逆説』

小島信夫（こじま のぶお） 1915年生 作家 『アメリカン・スクール』『抱擁家族』

島尾敏雄（しまお としお） 1917年生 作家 『死の棘』『島の果て』

李恢成（り かいせい） 1935年生 作家 『砧をうつ女』『追放と自由』

針生一郎（はりう いちろう） 1925年生 評論家 『針生一郎評論(全6巻)』『文化革命の方へ』

小島輝正（こじま てるまさ） 1920年生 フランス文学 『サルトルの文学』『アラゴン シュルレアリスト』

秋山駿（あきやま すすむ） 1930年生 文芸評論家 『内部の人間』『無用の告発』

栗田勇（くりた いさむ） 1929年生 作家，評論家 『知的正統のために』『紅葉の美学』

生田耕作（いくた こうさく） 1924年生 フランス文学 『るさんちまん』『ダンディスム』

野間宏（のま ひろし） 1915年生 作家 『真空地帯』『青年の環』

岩波講座 **文 学 2** 創造と想像力
第2回配本 （全12巻） **¥1700**

1976年1月10日 第1刷発行 © 岩波書店

発行所：〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 株式会社 岩波書店 電話 03-265-4111 振替東京 6-26240

印刷／精興社 製本／松岳社青木製本

岩波講座 文学 2

目次

I　想像力とはなにか

1　創造の原理としての想像力……大江健三郎……三

2　歴史文学における想像力の問題……杉浦明平……二七

3　想像力論の歴史……渡辺広士……五三

II　想像力の具体化

1　フィクションの問題……井上光晴……七七

2　見ることと想像力……長谷川四郎……八六

3　文学における模倣と引用
——多くの引用を含む断想……入沢康夫……一二〇

4　観察……小島信夫……一三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5 想像力を阻むもの……島尾敏雄……一五五
6 想像力を阻むもの……李恢成……一六七

III 想像力のつくり出した世界

1 イメージと意味……針生一郎……一八七
2 人間の自由……小島輝正……二一〇
3 善と悪の問題……秋山駿……二二九
4 象徴と超現実……栗田勇……二四六
5 新しさの創造……生田耕作……二六六
——序説

IV 創造する力とは何か……野間宏……二八五

I

想像力とはなにか

1　創造の原理としての想像力

大江健三郎

一

創造された文学作品を読む。その読みとる行為自体が、読み手であるわれわれの一人ひとりにおいて創造である。それはいかにもあきらかなことだ。そしてこのわれわれの側の創造において、想像力が機能を発揮する。それを考えると、このあきらかさの内容はもっと確実になろう。しかも、われわれ読み手の側の想像力の機能について考えることが、文学作品の書き手における想像力の機能について具体的な手ごたえとともに考えることを可能とする。創造の原理としての想像力がそこでまるごと把握しうるものとなる。

文学作品の書き手と、それを読むわれわれの一人ひとりにおける想像力の機能の働らきかたを実際に見よう。実例が、想像力の創造の原理としてのありかたをわれわれに教える。僕はひとりの実作者として、そのような方法で想像力について考えることを有効に思う。

バルザックの『浮かれ女盛衰記』寺田透訳におけるヒロインの回心の情景が、まことに単的に、かつ奥深い構造において、想像力の機能の働きかたを呈示する。そのような情景を創造したバルザックの想像力の、ありふれたいいかたにはなるがまさにバルザックよりほかにない天才と、われわれの想像力がただ静的なイメージと静的なままのイメ

ージの連続(受身で汽車の窓からの眺めに眼をゆだねているような静的連続)をしか書物に読みとるのではないことのスリリングな再発見が、そこから喚起される。

『浮かれ女盛衰記』のヒロインはその男への魔力にしたがってまず「電気えい(ラ・トルピーユ)」と綽名された娼婦である。しかし彼女エステルのイメージが、はじめにわれわれに定着し、そして生きいきと動くのは、彼女が愛する男リュシアンとの愛を契機に、再生をねがって宗教的な教育施設に入ってからである。バルザックはおおいに意図的に、冒頭、彼女の「電気えい(ラ・トルピーユ)」としての面目をわれわれに対してあいまいにしていると感じられる。彼女とその恋人の保護者イスパニア人エレーラは、その教育施設で、なかば修道院的な生活にいる彼女が、せきとめられた愛ゆえについに魂と肉体の正常な維持の限界にたちいたっているのを見出す。

《彼は面倒を見てやっている娘が、庭の、四月の太陽に愛撫される葡萄棚に沿って、腰掛けに腰を降しているところを見かけた。彼女は寒いので、そうして煖をとっているように見えた。学友たちは、しぼんだ草にも似た彼女の蒼白さ、死んで行くかもしかのような目つき、憂鬱そうな姿勢を、関心をもって見つめていた。エステルは立ち上ると、彼女の持つ生命はどんな僅かか、また、言おうなら、生命に対してどんなに気乗り薄かを示すかのような動作で、イスパニア人の前に進みよった。このあわれな漂泊の女、この傷ついた野生のつばくろは、カルロス・エレーラの哀傷をふたたびそそった。》

ついにエレーラはエステルが洗礼で清められた後、ふたたびリュシアンに会えるだろうといってやらざるをえない。エステルはほとんど気を喪いそうになる。そしてわずかに回復しての会話。

《「神様はおやさしゅうございます。私の心を読んでくださいます」と彼女は言葉を引き取った。

エステルの声音、目差し、仕草　態度にあざやかに現われた甘くかぐわしい初々(ういうい)しさに負けて、エレーラはは

じめて彼女の額に接吻した。

「道楽者たちはあんたにうまい名をつけたものだ。あんたは父なる神をも誘惑することだろう。今しばらくやむをえないが、それがすんだらあんた方は二人とも自由の身にしてあげよう」

「二人とも」と彼女は法悦に似た喜びをこめて一つ言葉を繰り返した。

寄宿生と教母たちはこの光景を遠くから見て、一驚を喫した。彼女たちは、エステルを別のエステルに比較してみて、何か魔法の業に立ち会ったのじゃないかと思った。全く趣きを一変した娘が生きているのだった。彼女はふたたび本来の愛に満ちた性質を現わして、淑やかに、愛くるしく、悩ましく、浮き浮きした姿だった。要するに彼女は復活したのだ。》

この情景のうちのヒロインのイメージのみでも、単にそれが卵型の額縁に入れられるにふさわしい絵姿のようにはつくり出されていないことが明瞭である。葡萄棚の脇で春の光を受けている思い屈した娘、それも学友たちの眼（想像力と文学作品における眼・視点の課題はあとにそれを論じてゆくことになるであろう）に写った娘の肖像は、いかにもロケットにおさめられる古式な絵姿のようだ。しかしバルザックはそこでもすでに、学友たち、エステルの内部についてはなにも知らぬ初心な学友たちの眼に映るエステルの絵姿と、千軍万馬のエレーラの心に衝撃をあたえるものとしてのエステル像との間のくいちがいを周到に呈示する。われわれは、このふたつのイメージによって自分のうちにひきおこされるダイナミックな想像力の動きを、まず自覚しているのである。（想像力のダイナミックな本質についても、つづけてそれを論じてゆくことになろう。）

そしてわれわれの想像力に深く根ざして生きはじめたエステルとともに、われわれは『浮かれ女盛衰記』を読みすすめてゆく。エレーラに説得されて彼女はリュシアンの危急を救うためあらためて娼婦「電気えい（ラ・トルピュ）」に戻り、金満家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の男爵の思いものになる決断をしなければならぬ。

《最後の祈りをとなえ終ってから、彼女はそのうるわしい生涯を、心に抱いていた名誉を、栄光も節操も、恋も、断念して行った。そして立ち上った。

「まあ、奥様、もう二度とそういう風にはおできになりませんわ」プリュダンス・セルヴィアンは主人の崇高な美しさにわれを忘れて叫んだ。

彼女は可憐な遊女の目にその姿が入るように手早く鏡台をまわした。空に飛び去って行く魂がまだ少し目に宿っていた。ユダヤの女らしい肌の色がきらきら輝いていた。涙は熱火のような祈りに吸いつくされていたが、一度涙に浸ったまつげは夏の雨にあった葉の茂みに似て、純愛の太陽がそこにいやはての輝きをそそいでいた。唇は、天使にささげた最後の祈願の文句に似た表情をとどめていた。彼女は、けがれのない自分の生涯を天使の手に委ね、そうして殉教者と同じ棕櫚の葉を、天使から借り受けたのにちがいない。要するに彼女には、王冠と現世と愛とに別れを告げた刹那のマリー・スチュアートの身に輝いたにちがいない荘厳の趣きがあったのだ。

「こうしているところをリュシアンに見て頂きたかったわ」押し殺したような溜息を洩らすと彼女はそう言って、それからふるえ声でこう言いついだ。「これからはもう、でたらめをしようじゃないの……」

この言葉をきくと、ヨーロッパはすっかり唖然とした。天使が不敬な言葉をはくのをきいたら、こうもあろうかと思われるありさまだった。

「何さ、私の口ん中に歯のかわりに乾丁子が生えているかどうか、じろじろ見てどうしようというのよ。私はね、今となっちゃもうただのいやしいけがらわしい女よ、お女郎よ、泥棒女よ。イギリス紳士を待ってるだけよ。だからさ、お風呂をわかして、私のお化粧の支度をして頂戴。もうお昼だわ。きっと男爵が取引所の仕事をすま

せてやって来るわ。私、待っていたわって言うつもりよ。それからアジアには、ちょいとすてきな御馳走の支度をあの人のためにしてもらいたいの。ね、あの人をのぼせ上らせてみたいのよ……。さあ、やって、やって　姉さん……。一つげらげらやりましょうよ、つまりさ、ひとっぱたらきしましょうよ」》

この情景にもヨーロッパと綽名される召使セルヴィアンの眼が導入されて、まずエステルの悲嘆にみちた決断の清らかな美しさをくっきりと映しだし、それゆえにこそわれわれもまた、むしろ彼女以上にすっかり唖然とさせられてしまうようなダイナミックな効果がしくまれている。あとにのべるように、この効果はそこで想像力の機能がもっともよく賦活されて働く効果である。バルザックはまことにわれわれ読み手の想像力の機能の発揮をさそいだすことに細心で、それを詐術的だとする者すらもいるかもしれない。とくにさきの引用例における学友たち・エレーラのそれぞれの眼・心理。この引用例の召使の眼・心理そして鏡！

しかしこれらいちいちの情景のなかにおける想像力の機能のはたらきにもまして、決定的に想像力についてわれわれに教えるのは、この二つの情景をむすんでおこなわれる、エステルのダイナミックな転換である。しかもそれはここに僕が恣意的にこの二つの情景をむすんでみるということではない。口幅ったいいいかたにはなるが、バルザックを読むということは、ある時間の流れのうちにおいて、生身の肉体と意識であるわれわれが、抗しがたく、しかも自発的に、この二つの情景をむすぶダイナミズムを経験することである。想像力的な文学を読む経験が、本質においてそのような構造をなしており、バルザックの文学創造はこの構造にたって、もっともよくその想像力の特質を発揮したのでもまたあろう。

さてこの二つの情景をむすんでのダイナミックなエステルの転換とは、もちろん第二の情景に焦点がある。そこでわれわれのイメージにあらためてつくりあげられたエステル像は、じつに生きいきと動く強烈なものとなる。そのエ

ステル像の、新しくわれわれの想像力を動かす仕方は、第一のエステル像と比較を絶するほどのものである。原則的にいえば、文学に表現されたイメージとして、その基本的な条件を考えれば両者は等価でなければならないだろう。事実、われわれがまだ第一の情景のページまでしか読みすすんでいなかった時、第一のエステル像はすでに充分に魅惑的であった。それは想像力をもかきたてた。その上で第二のエステル像に出会うにいたって、その時はじめてわれわれに、この強烈に生きているエステル像の背景にひきさがって色褪せて見える、古い写真のようなイメージとして、第一のエステル像が見えてきたのではなかったであろうか？　この二つの情景をむすんでのエステルのダイナミックな転換に根ざしつつ、いったいなにがわれわれの想像力の機能におこったのか？

もし第一のエステルがこのように周到にわれわれの前に呈示されることがなく、イメージとしてわれわれの肉体と意識のうちによく定着していなかったとしよう。また第二のエステルへの転換の直前に、最終の花のようにあざやかに開く第一のエステルのイメージの提出、いわば全面的な再現(音楽に見られるような)がなかったとしよう。その時、おそらく第二のエステルの呈示は、たとえそれがいかに奇怪でも、われわれの想像力をこのようにも強く鋭く揺さぶりはしなかったのではないであろうか？　考えてみれば、第二のエステルは、ここにあるリュシアンへの自己犠牲と絶望の激しい力こそかつては見あたらなかったのではあるが、第一のエステルになる前の「電気えい(ラ・トルピーユ)」のあらためて現実化したイメージにほかならないのである。しかもなお第二のエステルへの転換をつうじて、この小説がわれわれにあたえる衝撃は決定的なものだ。あらためて問わねばならぬ。いったいなにが、この二つの情景をむすんでのエステルのダイナミックな転換に根ざしつつ、われわれの想像力の機能におこったのか？

問題はこのダイナミックな転換そのものなのだ。原理的には、われわれの想像力をもっとも強く揺さぶったのは、第一のエステルでも、第二のエステルでもなかったのである。第一のエステルが、第二のエステルに転換する・造り

かえられる、しかも彼女自身の決断において一挙に変ってゆく、その変化そのものが、われわれの想像力をとらえたのである。われわれの想像力は、このヒロインの転換に強くひきつけられ、そこにみずから参加して、その転換をもっとも全体的にかつ根柢的に経験するために自分の想像力の機能を全開にして活動させたのである。

バルザックの側からいえば、すなわちこの小説の書き手の側からいえば、かれはそのようなヒロインの転換を書くことによって、その想像力の緊張と飛躍を最高の水位にみちびくことができた。想像力の機能はこのように働いてバルザックの創作を、かれもまた日々経験していたのであるにちがいない日常的な沈滞から高くおどりあがらせた。われわれの側からいえば、すなわち読み手の側からいえば、われわれはあたえられた平板なイメージの羅列をただそれと認めつつ、なかば睡ったような読書をつづけることにおいて、われわれ自身の想像力を行使するのではない。劇画あるいはテレヴィ映画を漫然と眺めるのと同様に、そのような読書のためには想像力の参加は不必要である。われわれは、このヒロインの一瞬の転換におけるような、イメージの決定的な造りかえに参加するためにのみ想像力を持っているのである。そして真の文学とは、そのような想像力の賦活をつうじてわれわれに創造行為そのものへと、意識と肉体ぐるみ参加させるものなのである。

このように現実に造り出されてある文学作品をつうじ、読み手としての経験にそくして考え、かつひとりの実作者として、書き手の経験をもそこに加えて考える時、僕にはガストン・バシュラールが『空と夢』宇佐見英治訳の冒頭で定義している想像力についての考え方が、もっともなじみやすいものに思われる。

《いまでも人々は想像力とはイメージを形成する能力だとしている。ところが想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪形する能力であり、それはわけても基本的イメージからわれわれを解放し、イメージを変える能力なのだ。イメージの変化、イメージの思いがけない結合がなければ、想像力はなく、想像するという

行動はない。もしも眼前にある或るイメージがそこにないイメージを考えさせなければ、もしもきっかけとなる或るイメージが逃れてゆく夥しいイメージを、イメージの爆発を決定しなければ、想像力はない。知覚があり、或る知覚の追憶、慣れ親しんだ記憶、色彩や形体の習慣がある。想像力 imagination に対する語は、イメージ image ではなく、想像的なもの imaginaire である。或るイメージの価値は想像的なものの後光の広がりによって測られる。想像的なもののおかげで、想像力は本質的に開かれたもの、のがれやすいものである。人間の心象(プシスム) psychisme においては、想像力とはまさに開示の経験であり、新しさの経験に他ならぬ。他のいかなる性能よりも想像力は人間の心理現象を特徴づける。ブレイクが明言しているとおり「想像力は状態ではなく人間の生存そのものである」》

二

ガストン・バシュラールの想像力論は、人間の想像力を当の人間の意識と肉体から切りはなして分析するかわりに、つねに人間の生きてゆくあり方と切りはなしえぬものとして、全体的な人間そのものの考察にかさねて論理をすすめてゆくことにあるだろう。その態度自体が、人間の生存そのものである想像力という、ブレイクの言葉を具体化し深化させている。同時に文学という人間の生存そのものを言葉において現実化する作業にとって、もっとも実際的な啓示にみちた想像力論となっている。僕は様ざまの局面において、バシュラールの想像力論に喚起されつつ、ひとりの実作者としての考え方を展開してきたものであることをここにあきらかにしておきたい。

文学という人間の生存そのものを言葉において現実化する作業。この作業は人間にとってどのような特徴をあきらかにする作業であるのか？　それは、人間の意識と肉体とのすべての機能、存在の先頭に想像力をおしたてて、人間

の全体をその想像力の示す方向へ推進させ・投げ出そうとする作業である。このように想像力によって方向づけられた人間の意識と肉体は、現実にここにあるかれ自身には到達不可能なものにむけてみずからを推進させ、投げ出すことができる。言葉によって、ひとりの個としての自分の人間的な根源にいたり、そのように人間であることを綜合的・全体的に把握するために、人間は文学をつくり出すと僕は考えるものだが、その人間的行為のために、人間の意識と肉体に、かれ自身をこえるダイナミックな推進力をあたえるのは、想像力である。

また、そのような個の深みにおりる個人の作業が、文学においては人間の共通の場へ開いた道をあゆむことにかさなるのであるが、そこでも個にほかならぬひとりの人間の営為をそのまま共通の人間の広場におくのは、言葉の機能を支え、かつそれに支えられた想像力である。

そして僕は、個としての人間が、社会・世界・宇宙の全体的な構造のなかで、暗黒から生れ、暗黒にむかって死んでゆく人間としての自分の根本的な意味を把握するために、文学をつくり出すと考えるが、この根本的な意味の把握にむけて人間を押し出す力も、想像力よりほかにはないにちがいない。それは実際、ここにあるかれ自身によっては到達不可能のところにある把握である。人間はむしろその充足を拒まれているゆえに、つねにそれを渇望しそこへ向けて自分を投げ出すことをめざすという哲学者もいた。すくなくとも、文学において人間が、意識と肉体とのすべての機能・存在の先頭に想像力をおしたてて、一箇のロケットのように社会・世界・宇宙の全構造へ、死の暗黒へ、かれ自身を投げ出すのを、すくなくともわれわれは経験的に知っている。

文学とはそのようにことごとしく大仰なものでもなかろう、という声はおおいにあるにちがいない。バルザックのような文学者の創造の力をかりれば、この根本の原理はひとりの浮かれ女の回心をつうじてすら具体的・現実的にあきらかであるから。しかし根本の原理がそこをつらぬいていることをまで見おとしてしまうことはできない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com